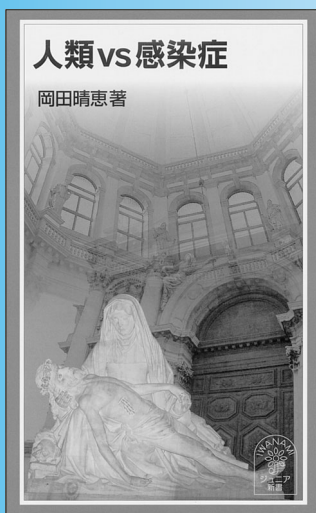


感染症との闘いから学ぶ

【評者】菅井敏行 国立感染症研究所ウイルス第3部

人類 VS 感染症

岡田晴恵(著)



定価 819 円(本体 780 円+税 5%)
新書判, 212 ページ
岩波書店(Tel.03-5210-4111)

人類には感染症に対して非力だった時代がある。流行するたびにそれは疫病と呼ばれ、多くがその犠牲となり、人々は恐れ天を仰ぎ祈りを繰り返した。

科学はこの疫病を起こす原因を明らかにし、医学はそれらとたたかうための術を進歩させてきた。さらに病原体の発見とそれらについての研究から、疫病を免れる術としてワクチンも見いだした。人類は感染症を克服するためにその叡智を結集させ立ち向かってきたのである。

では、人類は感染症を克服できたのか。人類の前には未だ克服されず、いまなおその勢いを増す病原体がある。また、一度打ち勝ったと思っていた結核などの感染症もわれわれの前に再び「再興感染症」として現れ、新たな脅威となっている。また、これからも次々と病原体は顔つきを変え、生体の免疫を逃れ、したたかに生き残っていくものもあるだろう。また長い間、開発の手が及ばなかった地域に土着していた病原体が、新たな開発により人の世界に侵入してくることも十分に考えられる。

本書は一貫して、感染症に対しての漠然とした恐怖や曖昧な知識、またときに過剰な危惧を持つことはその解決に何も意味をなさず、正しい知識こそが最大のワクチンであると主張している。

本書はまず、感染症が社会に与えてきた影響について、歴史の事実をひもとく。そのなかで命を慈しむ人、病原体に立ち向かう研究者、勇気と情熱をもって感染症の撲滅に全力を尽くす医師の活躍が生き生きと描かれている。また、病気だけにとどまらず、誤った感染症の理解が患者へのいわれもない差別につながった史実を、ハンセン病やエイズを例にあげ指摘している。

また、著者は若い世代に向け、感染症から身を守るには、自らが持つ正しい知識こそが最大のワクチンとなることをここでも強く伝えている。著者の視点は社会の進む先を見つめている。若い世代を感染症から守ることが、やがて生まれくる次の世代を守ることにつながることを強調している。さらに、近年驚異となっている鳥インフルエンザと新型インフルエンザに対する記述も詳しい。鳥の間で流行しているインフルエンザウイルスがどうして人間に驚異となるのかについても、わかりやすく書かれている。

本書のあとがきは著者の次世代へのやさしくあたたかい“いのち”に対するメッセージでしめくられている。公衆衛生の精神とは、人間を慈しむことから始まる。自分がこの世に生を受けていることは、親から子へと鎖のように引き継がれた、命の流れのなかにあることを自覚しなければならない。感染症が流行し、為す術もなく多くの人が倒れた時代がある。現代においてもこれらの史実から学ぶことは多く、本書からは公衆衛生の精神がどのように生まれたのかをも知ることができる。本書はジュニア新書という中高生向けの体裁ではあるが、内容は深く公衆衛生を業務にする者にとっても示唆にも富むものである。